

## 名言・格言

### 「朝を愛す」 室生犀星

僕は朝を愛す

日のひかり満ち互る朝を愛す

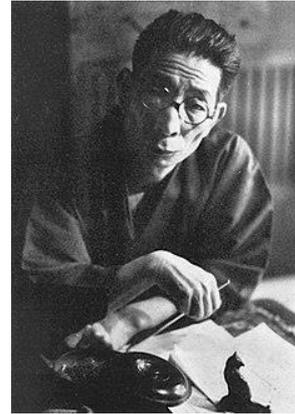
朝は気持が張り詰め

感じが鋭どく

何物かを嗅ぎ出す新しさに餓えてゐる

朝ほど濁らない自分を見ることがない、

朝は生まれ立ての自分を遠くに感じさせる



朝は素直に物が感じられ

頭はハツキリと無限に広がつてゐる

木立を透く冬の透明さに似てゐる。

昂奮さへも静かさを持つて迫つて来るのだ。

朝の間によい仕事をたぐりよせ、

その仕事の精髓を掴み出す快適さを感じる。

自分は朝の机の前に坐り、

暫らく静かさを身にかんじるため

動かずじつとしてゐる。

じつとしてゐる間に朝のよい要素が自分を囲ひ。

自然のよい作用が精神発露となる迄、

自分は動かず多くの玲瓏たるものに烈しく打たれてゐる。

### 室生犀星 むろう-さいせい

1889-1962年 大正-昭和時代の詩人、小説家。

明治22年8月1日生まれ。逆境の幼少期をへて詩人をこころざす。大正2年北原白秋の主宰誌に「小景異情」を投稿し、生涯の友萩原朔太郎と知りあった。

7年「抒情小曲集」を刊行。30歳代から小説に転じ、

「あにいもうと」、「杏つ子」(昭和33年読売文学賞)、「かげろふの日記遺文」(34年野間文芸賞)など

の代表作がある。芸術院会員。昭和37年3月26日死去。72歳。石川県出身。本名は照道。作品はほかに「我が愛する詩人の伝記」など。

室生犀星記念館

<https://www.kanazawa-museum.jp/saisei/>